



こーひーぶれいく

温泉巡り

山田 一孝

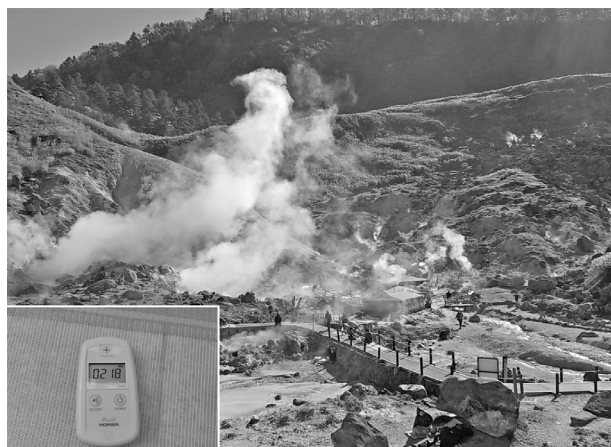
Yamada Kazutaka

自慢できるほどの趣味ではないが、温泉巡りが趣味である（スーパー銭湯含む）。露天風呂のベンチで熱くなった体を冷ましていると、日々のストレスはすべて解消される（といっても、ストレスは何もないのであるが）。

西東京が生活拠点の筆者にとって、箱根までは小田急で1時間、箱根のすべての温泉を制覇するのが筆者のささやかな夢である。また、東京にはスーパー銭湯がたくさんある。自家用車を所有していない私でも、駅からスーパー銭湯を結ぶシャトルバスのお陰で手軽に行くことができる。温泉&スーパー銭湯好きには、便利なこと、この上ない。

筆者が勝手に隠れ家と呼んでいる八王子のスーパー銭湯での出来事。平日の夜だったこともあって、浴場はガラガラであった。炭酸泉に浸かっていたのは、私ともう1人の青年。ふと、お湯から顔を出している隣の好青年に目が釘付けになった。なんとプロテニスプレーヤーの錦織圭選手ではないか。「何で？世界のKeiが、オレと一緒に炭酸泉かよ？」「いや、Keiがこんなところにいるはずがない」（後に、錦織選手は八王子で肘のリハビリをしていたことを知った。）自分のお腹を見て、ため息が出た。テニス未経験者の私がKeiにテニスでかなわないことは疑う余地はないが、容姿でも全く歯がたたないことが分かった。このときばかりは神様を恨んだ。「神様って不公平。」

ラジウムで有名な秋田県の玉川温泉と山梨県の増富温泉を制覇した。玉川温泉は酸性泉で、pHは1.2。湯煙は目にしみるし、穴という穴はヒリヒリと痛む。肌に感じない放射能の影響よりも、酸の刺激の方が



玉川温泉郷の岩盤浴テントの中で測定した空間線量率は、東京よりも少し高い程度であった

強そうだ。ラジウム温泉郷の空間線量率はそれほど高くはない。それもそのはず、ラジウム温泉の効果はラドンを吸入したときの内部被ばくを狙ったもので、外部被ばくではない。

筆者にとって温泉巡りは実益を兼ねた趣味である（どこが実益なんだ？）。

私は、放射線生物学でラジウム温泉を題材にして「身近な放射線」を教えている。空間線量率を示して、ラジウムによる外部被ばくとラドンによる内部被ばくの違いについて説明できる絶好の教材である。震災以降、科学者が放射線ホルミシスを語りにくい世の中ではあるが、自分の体験談として1つの学説を語るのであれば問題はなかろう。

あまり科学的ではないのだが、ラジウム温泉に行くと、免疫力が上がったような気がする。気がするだけかもしれない。さあ、これをどうやって検証しようか？ラジウム温泉と放射能泉ではない温泉の効果を比較しなくてはならない。いや、心地良い気分は、大自然に囲まれてマイナスイオンをたくさん吸ったからかもしれない。そうであれば、秘境の温泉とスーパー銭湯との比較も追加実験しなくてはならないか？

これをどうやって客観的に証明するか？

臨床検査技師の妻に採血してもらってリンパ球数を測定すれば、有意差は出るのだろうか？そもそもこれは人体実験か？検体数が筆者自身のデータだけでは、学術雑誌には受理してもらえないだろうか。

温泉巡りの趣味は、「好きこそものの上手なれ」となるか、「下手の横好き」となるか。

次は、鳥取県の三朝温泉に行ってみたい。いずれ、台湾の北投温泉にも遠征したい。

狙うはイグ・ノーベル賞！

（麻布大学）